

ノヴァーリスの刺激理論受容における生理学用語の使用について
 —シェリングとの比較において—

井 戸 慶 治

Über die physiologische Terminologie von Novalis bei der
 Rezeption der Erregungstheorie
 —im Vergleich mit der von Schelling—

Keiji Ido

Abstract

Die Erregungstheorie oder Brownianismus ist eines der wichtigsten Objekte der wissenschaftlichen Studien von Novalis. Es ist schwierig, ihre synonymischen Begriffe, d.h. Erregbarkeit, Reizbarkeit und Irritabilität zu unterscheiden oder zu identifizieren. Die vorliegende Arbeit untersucht zunächst die Begriffe bei den wichtigen Physiologen und Medizineren im 18. Jahrhundert nach der sekundären Literatur, dann die in den naturphilosophischen Schriften von Schelling und schließlich die in den Aufzeichnungen von Novalis.

Der Überblick über die Begriffsgeschichte zeigt verschiedene Auffassungen je nach dem Autor. A. v. Haller unterscheidet zwischen der Reizbarkeit (Irritabilität) als dem Vermögen der Muskelfaser, auf Reize mit Kontraktionen zu reagieren, und der Sensibilität als dem der Nerven, nach Reizen eine Empfindung im Gehirn hervorzurufen. Browns "incitabilitas" (Erregbarkeit usw. als deutsche Übersetzung) könnte man sowohl für ein Vermögen der Nerven als auch für eine aufbrauchbare Größe halten, deren Verhältnis zu Reizen Gesundheit oder (sthenische und asthenische) Krankheiten bestimmt. Nach den ersten Rezipienten des Brownianismus in Deutschland bildet Röschlaub die Lehre zu der sogenannten Erregungstheorie um. Darin verbindet er unter dem Einfluss Kiehmeyers das Begriffspaar (Irritabilität und Sensibilität) mit der Erregbarkeit Browns als einem synthetischen Begriff.

Im Anschluss an Röschlaub ordnet Schelling der Erregbarkeit das Begriffspaar unter, und setzt die Irritabilität (mit der Kapazitaet für

Sauerstoff) und die Sensibilität in ein umgekehrtes Verhältnis. Des weiteren würdigt er besonders in ‘Erster Entwurf eines Systems der Naturphilosophie’ die Sensibilität als den “Lebensquell”, der den Organismus von dem allgemeinen Mechanismus der Natur befreit.

Novalis nimmt auch die eben genannten Beziehungen der Begriffe auf. Dabei schwankt die Bedeutung der Reizbarkeit: in den vor Herbst 1798 entstandenen Aufzeichnungen kann man sie meistens mit der Erregbarkeit Browns identifizieren, hingegen in den späteren mit der Irritabilität als Gegensatz zur Sensibilität. Er kritisiert durchaus das Mechanistische der Lehre Browns, obwohl ihm die Konsequenz und die Einfachheit der Theorie und die kühne Behauptungsweise sympathisch ist. Über Schelling schätzt er die Sensibilität als das menschliche Vermögen, das die Möglichkeit der Freiheit, der Willkür und der Steigerung zur höheren Stufe garantiert.

はじめに

ノヴァーリスがおこなった自然学研究の重要な対象のひとつに、医学におけるブラウン説、ないしその改良型としての刺激理論 (Erregungstheorie) がある。これに関する断片や覚え書きの中には、Erregbarkeit、Reizbarkeit、Irritabilität という類義の用語 (訳語としては、興奮性、刺激性、被刺激性、刺激反応性などが用いられている。)が見られるが、それらの指し示す内容は、同じ場合もあれば異なる場合もあり、加えて、ひとつの用語であっても時期によって意味が変化している可能性がある。このような曖昧さは、断片や研究ノートという形では、これらの用語が定義づけや説明なしに用いられていることと相まって、理解を非常に困難にしている。これらの用語の意味を確定するためには、当時のさまざまな文献におけるこれらの用語の意味を調査し、その上で前後の文脈から判断しなければならない。ここではそのひとつの試みとして、シェリングの自然哲学諸著作におけるこれらの用語の使用を調べ、それ以外の医学、生理学関係の著者については二次文献によって補う。しかるのちに、ノヴァーリスの記述における用語法を検討し、合わせて刺激理論の受容について考察したい。そのさい、これらの用語に対して一対一対応で訳語を用いるのは、かえって混乱を招くことになるので、必要な場合以外は原語で通すことにする。¹⁾

1) 途中、綴りの不一致があるが、原著に従ったものである。

1) 概念史的概観

さまざまな辞書を引いてみると、Erregbarkeit, Reizbarkeit, Irritabilität、またそれらの形容詞形である erregbar, reizbar, irritabel は、刺激を受けることができる(こと)、とか、刺激に対して敏感な(こと)、という同じ意味を持ち、ひとつの用語の説明として他の二つが用いられていることも多いのに気づく。これは、少なくとも日常の使用においては三つの表現がほとんど同義語と見なせることを示している。グリムにおける reizbar, Reizbarkeit の説明によれば、これらの言葉はまず生理学の用語として使用され、そののちに一般化されてきたことがわかる。ReizbarkeitやIrritabilitätは、ラテン語の学術用語incitabilitas, irritabilitas などの翻訳語として使用され始めたと思われる。

これらの用語についてのメラーの研究によれば、Reizbarkeit の概念は、生理学、病理学など基礎医学的研究において重要な役割を持っているにもかかわらず、その意味内容は非常に漠然としていて多義的であり、研究者によってさまざまに異なる解釈がなされてきた。その概念史の概観ののちに、次のように結論づけられている。この概念の最も狭い解釈は、Reizempfänglichkeit (刺激受容性) であり、生きた物質ないし神経構造の刺激受容能力である。(例としてプファッフが挙げられている。) もう少し広い意味では、外部の変化を受容し、結果としての活動で答える、すべての生ける筋繊維の特性である。(例：グリッソン、ライルなど) さらに広い意味としては、外部からの作用に対し、器官に固有の機能、あるいは物質代謝の能動的変化でもって反応する、生ける物質の能力がある (例：ブラウンなど)²⁾。Reizbarkeit に関するこれらさまざまな解釈や、その関連語、類義語の意味については、メラーの研究の中に一覧表があり、われわれはそれを見てこれらの用語の意味の変遷と多義性をおおよそ把握することができる³⁾。ここではメラーを含めたいくつかの研究を用いて、刺激の理論とドイツへのブラウン説輸入にかかわった医学者たちの解釈について概観してみたい。

この概念をはじめて本格的に取り上げたのは、イギリスのグリッソン(1597-1677) で、有機体の形態的構造エレメントである fibra (繊維) には、外部の

2) Hans-Jürgen Möller: Die Begriffe “Reizbarkeit” und “Reiz”, Konstanz und Wandel ihres Bedeutungsgehaltes sowie die Problematik ihrer exakten Definition. Stuttgart, 1975, S. 52.

3) a.a.O., S. 54.

影響によって運動の生起か変化を引き起こす irritabilitas の能力があるとした。18世紀の中頃になると、ドイツのハラー (Albrecht von Haller, 1708-1777) が、Reizbarkeit (=Irritabilität) と Empfindlichkeit (=Sensibilität) についての研究をおこない、それが生命の本質をめぐる論議の中で19世紀にまで影響をおよぼすことになる。彼は、アルプスの詩や旅行記の作者として知られる一方で、優れた解剖学者、生理学者であり、厳密な実験を重んじて思弁を排した。彼は、身体を reizbar な部分と、empfindlich な部分に分ける。reizbarなのは、接触に反応して収縮する能力を持つ身体の部分であり、empfindlichなのは、その接触を魂が知覚するか、その刺激を動物が苦痛の明らかな表徴でわからせるような身体の部分である。具体的には、前者は筋肉繊維であり、後者は脳につながる神経(髄)である。ハラーは、Reizbarkeit が死後しばらくのあいだ続くことを認めながらも、それが生きた筋肉にのみ帰せられる能力であるとし、筋肉の内部構造を基礎として、接触やその他の刺激にしたがって収縮する能力 (Kontraktilität) であると規定した。彼はこのように、刺激に対する筋肉の反応能力に着目したが、刺激を受容する能力については顧慮しなかった。また、神経に固有の Empfindlichkeit と、Reizbarkeit のあいだには直接の関係はないとした。Reizbarkeit は神経によって引き起こされるのではなく、筋肉に内在するものと考えたのである。ハラーの用語法に厳密に従えば、神経は reizen されるとは言えるが、reizbar ではないという矛盾が起こることがメラーによって指摘されている。⁴⁾

ブラウン (John Brown, 1735-1788) は、スコットランドの医師で、本国では認められなかったが、その理論は他の欧米諸国で精神上の一大運動にまで発展し、特にドイツではシェリングらの自然哲学やロマン派の医学に大きな影響を与えた。彼の説によれば、生きているものを命なきものから区別するのは、環境というものを持ち、その挑発に対して反応する前者の能力であり、これが神経系の中に座を持つ excitability, incitabilitas (Erregbarkeit など)⁵⁾である。生とは、刺激による興奮状態、生き残りのための戦いとして、また強制された

4】aa.O., S. 20. 実際、グリムには、“Nerven sind reizbare Fibern.”という用例が挙げられており、一般には神経に対しても reizbar という表現は用いられることがわかる。

5】長島隆：『ブラウン説とシェリング・ヘーゲル--シェリングとヘーゲルのブラウン説に対する評価と相違』、『日本医科大学基礎科学紀要』、第10号、1990年、28ページ、によれば、本来のブラウン説の用語 incitabilitas, excitability に対するドイツ語の訳語として、プファッフは Irritabilität, Erregbarkeit を用い、ギルターナーは Reizbarkeit、レシュラウプは Erregbarkeit を用いているという。

状態としてのみ理解される。ブラウン自身は excitability を明確に説明していないが、これは能力であるとともに、ある種のエネルギー源や燃料のような量的なものという面も持つようである。おのおのの有機体は、一定量の excitability を割り当てられていると仮定される。この excitability は、熱、食物、空気のような外部からの「刺激」(exciting powers, stimulant powers, erregende Potenzen, Reize) や体液、思考、感情による内部からの刺激で生じた興奮によって消費されるが、失った分の一部は休息中に回復される。適度な刺激によって有機体は健康になるが、刺激が強すぎても弱すぎても病気となり、その両極端、つまり excitability が刺激によって完全に枯渇するか、全く刺激のない状態は、死をもたらす。この理論によって、それまで対立するものと見られていた健康と病気は、刺激に対する反応という同じ根拠によって生じた、単に刺激付与の程度の異なる状態として捉えられることになる。病的状態は、刺激や excitability の量によって数的に表わされ⁶⁾、過剰な刺激による興奮状態である sthenic (強壯) と、刺激に対する過小の反応による asthenic (衰弱) の二つのタイプがある。その治療の目的は、適量の刺激の回復であるから、sthenic の病気においては刺激を減らし、asthenic の病気においては増やすという方法がとられる。刺激剤としてはアルコールや阿片が用いられ、驚異的な成功の例もあるが、死に至るような失敗例も多かった。「ブラウンの方法は、ナポレオンが起こしたすべての戦争よりも多くの死者を出した」という文句が複数の文献に引用されている。⁷⁾ブラウンの学説は、今日から見れば事実の裏付けのない、きわめて空想的で単純なものであるが、できるだけ数少ない原理で自然を説明しようとする試みのひとつとして理解される。

ドイツにブラウン説がはじめて取り入れられたのは、1790年のことで、ギルタナー (Christoph Girtanner, 1760-1800) の論文によるが、そのさいブラウンの名が出されなかったためにその後剽窃問題を醸した。もっとも彼は、本来のブラウン説に、身体の Irritabilität の程度はその酸素容量に帰せられるとい

6】 John Neubauer: Bifocal Vision. Novalis' Philosophiy of Nature and Disease. Chapel Hill, 1971, S. 171ff. には、ブラウンの主著『医学原論』“The Elements of Medicine” 1806年の英語版とプファッフによる1804年の独訳版における図表が示されている。

7】 以上の部分は、Möller, Neubauer の他、以下の文献による。Nelly Tsouyopoulos: Andreas Röschlaub und die Romantische Medizin. Stuttgart, 1982, S. 106f.

う理論を付け加えたのであるが。剽窃の疑いに対し、ギルタナーは、パロディーのつもりだったと述べ、そののちはブラウンの著作を批判する本を書いた。

エカテリーナ二世の侍医をつとめたヴァイカルト (Melchior Adam Weikard, 1742-1803) は、1795年にブラウンの『医学原論』(‘elementa medicinae’) ラテン語版からドイツ語に翻訳し、その後もブラウン説を広めるための手引き書や雑誌を出版した。彼はブラウン説のもっとも忠実な擁護者であったが融通がきかず、医学界の権威を攻撃してかえってブラウン説に不利益を招いた。

プファッフ (Christoph Heinrich Pfaff, 1773-1852) は、‘Über thierische Elektrizität und Reizbarkeit’ (1795) において、動物電気 (ガルヴァニズム) との関連でブラウン説を論じた。また、1796年には『医学原論』英語版からの独訳を出し、それに付した批判的注釈において、Erregbarkeit が再生的特性と消尽される生得的基盤という二つの解釈の可能性を持つ曖昧な概念であることを指摘した。彼は、刺激に対する筋肉の反応を、筋肉に独自の収縮能力から説明することはできず、その上に神経の協力が重要な意味を持つとした。刺激は筋肉によってではなく神経によってのみ受け入れられ、神経のこの刺激受容能力が、Irritabilität と呼ばれる。神経の中で刺激によって引き起こされた変化は、筋肉をそれ独自の反応能力 (Contractilität) による収縮へと導く。いずれがなくても収縮は起こらず、両者は相補的である。ハラーでは、筋肉の Contraktilität と同一視されていた Irritabilität が、プファッフにおいては神経の側にある別のものと考えられているのである。⁸⁾

バンベルクの医師であったマルクス (Adalbert F. Marcus, 1753-1816) とレシュラウプ (Andreas Röschlaub, 1768-1835) は、ブラウン説を実践の場において研究し、この町はブラウン研究の中心地となる。特に後者は、‘Untersuchungen über Pathogenie’ において、ブラウン理論にドイツ的哲学観念を取り入れていわゆる刺激理論 (Erregungstheorie) を創出した。この作品は若きシェリングに強い影響を与え、1800年に彼はバンベルクに赴いてマルクス、レシュラウプと協力する。シェリングとレシュラウプは、その後しばらくの交流ののち、離反してゆくことになるが、ドイツにおけるブラウン説も、ロマン

8) 以上の部分は、Möller の他、以下の文献による。Erk F. Hansen: Wissenschaftswahrnehmung und -umsetzung im Kontext der deutschen Frühromantik. Frankfurt a.M., 1992, S. 378f.

派の医師たちによる暫時の隆盛ののち、急速に衰退してゆき、代わって動物磁気（メスメリズム）が流行することになる。

レシュラウプの刺激理論によれば、生は死の脅威からのみ理解され、生は死の否定である。有機体は、それ自体のプロセスによって、自然の統一化（腐敗）のプロセスに抗して自己を主張しうるかぎりにおいて生きている。すなわち、生は個性化の能力である。有機体が個性化してその生を戦いとるプロセスは、同時に、有機体が外界の作用を伝達する能力の具体的な現れでもある。有機体が、いかにして外界の作用を伝えるのか、またいかにして自然の普遍化傾向にかかわらず自己を発現するのか、という問題は、当時の関心を集めていた。刺激理論は、生命のプロセスが、有機体と環境のあいだの相互作用の現れであることを示そうとする。そのような相互作用は、因果的なものではなく、原因と結果が同時であるようなものである。すなわち有機体は、受動的（受容性、Rezeptivität）であると同時に能動的（能動的抵抗、tätiger Widerstand）である。生命の原理としての Erregbarkeit は、有機体の Rezeptivität と Widerstandskraft ないし Energie のあいだの関係の表現である。そのようなものとしての Erregbarkeit は、ア・プリオリな総合的概念であり、理想的な量であり、具体的な現象においてはけっして求められない。しかし、Erregbarkeit の否定的条件、すなわち有機体の上述の二つのファクター間の理想的関係を妨げる条件は、量的に知ることができる。病気の始まりは、有機体とその環境の関係の妨害、しかもその受動性と能動性の変化による妨害である。この最初の妨害は、しかるのちにさまざまな質的（化学的）妨害を引き起こす。それゆえすべての病気は、最初の妨害に関しては量的で、つまりは過度の強壯 übersthenisch か衰弱 asthenisch である。本来量的な病気の条件と病気になった有機体内の質的な化学的变化を結びつけるため、レシュラウプはキールマイヤー（Carl Friedrich Kielmeyer, 1765-1844）の、Sensibilität（外部刺激を内面化する受容的特性）、Irritabilität（筋肉の収縮性）、Reproduktion（再生能力）からなる有機体の三段階機能説を取り入れる。再生産は、刺激理論において、万物の力動化（Dynamisierung）の原理となる。したがって、有機体を分析すれば、最終的な基体（Substrate）ではなく、つねに活動的で、自己を再生産する産物へと至る。Erregbarkeit は総合的概念であって、相互制約の関係にある対立する二者、すなわち Reizbarkeit (Erregung) と Energie (Wirkungsvermögen) からなる。両者は、受容性とエネルギーとして、結合された形でのみ現れる。両者は共通して外部の作用（刺激、Inzitement, inzitierende Potenzen）を伝達する。刺激は、直接有機体に作用するのではなく、有機体が生産的になってみ

ずからの力で対抗するように促すべく、間接的に作用する。⁹⁾

ヴァイマルの宮廷医フーフェラント (Christoph Wilhelm Hufeland, 1762-1836) は、ブラウン主義者たちの熱狂的運動に反対の立場を取ったが、かつてはバンベルクのレシュラウプらを訪れたこともあり、その刺激に関する理論はブラウン説の刻印を強く帯びているとメラーは指摘している。保守的な医学者と見られがちだが、実際には新しい傾向にもある程度興味を示したので、折衷主義者 (Eklektiker) と呼ばれる。

2) シェリング自然哲学における生理学用語

1790年代後半に書かれたシェリングの自然哲学三部作において、これらの生理学概念に関わる部分を抽出し、特に酸素容量との関連に注目してみる。

『自然の哲学なるもののための諸理念』(Ideen zu einer Philosophie der Natur, 1797) においては、Sensibilität と Irritabilität はひとつの箇所では触れられていない。両者は、「動物の有機体の能力」とされ、これは「衝撃の原理」(ein impulsives Princip) を前提とする。この原理なしには、動物は外部からの刺激に反応を返すことができず、有機体のこうした自由な反応作用によってのみ、外部からもたらされた衝撃は刺激と印象となる。そしてここには完璧な相互作用が支配している。外部からの刺激によってのみ動物は運動を産み出すように規定され、また逆に、みずからのうちに運動を産み出すこの能力によってのみ、外部の印象は刺激となる。それゆえ Sensibilität なしに Irritabilität なく、Irritabilität なしに Sensibilität はない。このように、ここでは二つの機能の密接な関連が強調される。

そして有機体のこれらの能力だけでは、生命を説明するには不十分であるとされる。そこには、もはや物質からは説明できないような「高次の原理」、個々の運動をすべて秩序づけ、まとめ、多様な運動から全体を産み出す原理が必要である。それは生氣論者たちが唱えるように「生命力」(Lebenskraft) とは呼べない。なぜなら、力 (Kraft) とは有限であるからで、つまり力というものは、それと反対の力によって制限されるということであり、この反対の力を想定せざるをえないのである。したがってこの「原理」となりうるものは、力よりも高いもの、経験的自然探求の外にあるもの、精神的なものではあるが精神 (Geist) そのものではないものである。それは、生命の原理として考えられ

9) 以上の部分は、Tsouyopoulos, S. 121ff. による。

た精神、すなわち魂 (Seele)、であるとされる。¹⁰⁾

『世界霊について』(Von der Weltseele, 1798) では、これらの概念を用いた叙述が、多様な形で展開されている。まず、動物の生命原理に関する諸説の論争を扱った箇所、「ハラーが筋肉の Irritabilität に求めた生命の根拠」¹¹⁾、「ハラーは一方で機械論的説明方法を捨てたが(というのも、Reizbarkeit の概念には、それが機械的原因によっては説明できないということが含まれているからである。)、しかし他方シュタール¹²⁾のように仮説的虚構へと逃避することもしなかった。」(S.558) という箇所があり、Irritabilität と Reizbarkeit が、いずれもハラーの同じ概念(刺激に対する筋肉の反応収縮能力)を表わしているということがわかる。なおシェリングは、ここで「偉大な」ハラーを高く評価し、彼によってはじめて機械論的概念からは説明できない生命の原理が提示されたとしている。「彼はこの表現によってすでに現象の将来的説明を予見し、生命の概念はそれぞれの自然の個体における能動と受動の絶対的合一としてのみ構成しうることを予言した。」(S.558) ただシェリングにとって惜しむらくは、ハラーは Reizbarkeit と神経の関連までは考えなかった。

このあたりの箇所でシェリングは、分極性の概念を取り入れて、生命の原理として正、負の二つを想定し、正の原理は個体の外部にあってただひとつであり、負の原理は個体の内部にあって多様であるとする。その検討の途中、注釈としてブラウンの理論が取り上げられる。いわく、ブラウンの thierische Erregbarkeit (便宜上「興奮性」という訳語を当てる) と erregende Potenzen (刺激) は、上述の正負の生命原理と一致しているように見えるが、事実はそのより下位の段階にとどまっている。ブラウンはその叙述から、Erregbarkeit の「基体」(Substrat) を考えていたのであり、これは全く非哲学的な概念であるとされる。そして実は、Erregbarkeit は総合的な概念であって、それは負の諸原理の多様性を表わすのだという。シェリングはこのようなブラウンの批判にさいして、プファッフによる翻訳を引用、参照している。(以上は S.559f.)

有機体においては、負の諸原理の均衡が妨げられると、それを回復しようと

10) 以上は Schelling Ausgewählte Werke. Schriften von 1794-1798, S. 372ff. からの要約。原典は Stuttgart/Augsburg, 1856 であるが、頁数は Darmstadt, 1980 の復刻版による。

11) a.a.O., S. 556. これ以後は、ページ数のみ本文にて示す。

12) Georg Ernst Stahl (1660-1734) フロギストン説でも知られるが、生氣論 (Vitalismus) の代表者であり、生命力 (Lebenskraft) の概念を用いた。

する傾向がある。例えば動物においては、負の原理のひとつである酸素は、呼吸によって取り入れられるので、これと結合する窒素が加えられることにより、酸素容量 (Capacität für das Oxygene) が増加し、均衡が保たれようとする。しかし、酸素はたえず新たに加えられるので、この均衡は一時的なものでしかなく、それが達成されるやいなや再び妨げられる。生命はそのような均衡の持続的な回復と妨害であるとされる。そしてこれが Irritabilität の根拠ではないかとシェリングは問いかけるのである。(以上は S. 565f. による。) なお、酸素容量と Irritabilität を結びつけるのは、ギルタナーの影響による。

さらに読み進むと、Irritabilität と酸素との関係が再び取り上げられるが、ここでは Reizbarkeit という言葉も散見される。例えば次の一節では、わずかな数行の叙述の中に双方の表現が使用されている。

「生体内の Reizbarkeit が多くなれば、栄養分への欲求も多くなる。運動の多い動物は、食欲が旺盛で、痩せたままである。[...]したがって、Irritabilität によって栄養分の作用が廃棄され、また逆も言えるということがわかる。」(S. 595)

ここでは、Irritabilität = Reizbarkeit と結論づけていけない理由は見いだせない。これらの用語の意味にずれがあるとすれば、少なくとも明解な論理は成り立たないであろう。このような、同一箇所における二つの用語の混用は、他の部分にも見られる (S. 598。ただしここでは、プファッフに関連している二箇所のみ Reizbarkeit となっており、原著者の表現をそのまま意識的に用いている可能性もある)。また少しのちに、spezifische Capacität (それぞれの器官に固有の酸素容量), spezifische Reizbarkeit という対概念が提示される (S. 601f.) が、上述の Irritabilität と Capacität の関連を考えると、これも Reizbarkeit = Irritabilität と考えなければ辻褄が合わない。

次に問題となるのは、Irritabilität、すなわち本来筋肉の能力とされたものを、神経と関連づけることである。

「正の原理は、神経を介して irritabel な諸器官に作用する。したがって、ある器官に通う神経が少なければ、それだけその器官の酸素容量は少なく、酸素容量が少なければ、それだけ器官における還元プロセスが必然的に (つまり、随意的でなく) なり、Irritabilität は休みなく作用する。」(604)

また逆に「ある器官に通う神経が多く、太いほど、その器官の酸素容量は大きくなる。そして、器官の酸素容量が大きければ、それだけ Irritabilität の発現 (それによって酸素が分解される。) における必然性と不随意は小さくなる。」

(604f.) 結局、随意的な筋肉の運動は、動物体のプロセスに依存しているのではなく、その原因は「より高い、動物体のプロセスからは独立した特性」であ

る Sensibilität にあるとされる (606)。このあたりでは時折ハラーの成果が参照され、その Irritabilität-Sensibilität 関係の理論を補完しようとする意図がうかがわれる。それとともに、筋肉と神経が対置されていること、Irritabilität の本来の座が筋肉であることが示される (607)。さらには、当時流行のガルヴァニズムの理論を用いて筋肉と神経のあいだの関係をつけようとしている (609 ff.)。A.v. フンボルトの研究が紹介されるが、それを退けて「異種の金属が神経と筋肉において対立する性質を目覚めさせる」(612) というのが、シェリングによる一応のガルヴァニズム解釈である。

ついで Irritabilität と Sensibilität の分極的対立関係が示される (614f.)。さらに「Sensibilität は Irritabilität に反比例して増減する。」(616)。その具体的説明は、「最も敏感な動物の運動は、最も随意的でなく、逆に運動の最大の随意は怠惰なものに見られる」(617) ということである。「これらすべての機能は同一の力の分岐にすぎない。われわれが生命の原因と考えざるをえないひとつの自然原理は、その個々の現象であるにすぎないこれらの機能としてあらわれる。それは同一の普遍的に広がる原理が、そのさまざまな現象であるにすぎない光や電気などとして顕現するのと同様である。」これに続いて「形成衝動」Bildungstrieb の概念が示されるが、これと二つの概念の関係づけは明確な形ではおこなわれず、次の作品に持ち越されることになる。(619)

以上のような概観から、『世界霊について』においては、ブラウンの Erregbarkeit への言及はわずかで、それも批判的であること、Irritabilität と Sensibilität については、両者を分離して考えたハラーに対して、両者の関連づけをおこなっていること、いずれの根拠、影響によるのかは明らかでないものの、両者の反比例の関係を呈示していること、だいたいにおいて Irritabilität = Reizbarkeit と見てよいことなどが結論づけられる。

『自然哲学の体系の第一草案』(1799) ではどうか¹³⁾。まず、前作品との顕

13) 以下の引用頁数は、Schelling, Schriften von 1799–1801による。ヘーリングは、ノヴァーリスがこの時期にはシェリングの作品を読んでいないとしているが、ノイバウアーは反論している。その明らかな証拠はないものの、Erregbarkeit を Sensibilität と Irritabilität に分析している点など、両者の共通点も見られるので、少なくとも『第一草案』にあるような知識を共有していたということはできるのではなかろうか。Theodor Haering: Novalis als Philosoph. Stuttgart, 1954, S. 606; Neubauer, S. 136.

著な相違は、Reizbarkeit の意味であろう。

「生あるものに対するあらゆる外部的影響は、生あるものを化学的諸力に従わせようとするものだが、ここでは刺激となる。すなわち外部的刺激は、それが本性にしたがって産み出すべき作用とは正反対の作用を実際には産み出すのである。したがって、Reizbarkeit という概念によって表現されなければならないのは、本当は受容性と活動性のかの相互規定なのであり、この概念は（その最高の普遍性においてである。－ハラーの Reizbarkeit のことは忘れ去ってほしい。）－まさに上述の対立するシステムを合一させる総合なのである。」(82)

「受容性」(Receptivität) と「活動性」(Tätigkeit) の相互規定、ないし総合は、改良されたブラウン説の Erregbarkeit (興奮性) のことであることが、のちに明らかになるから、ここでいう Reizbarkeit は、ハラーの Irritabilität ではなく、上述の Erregbarkeit と同じである。このことは少しのちの “der Reizbarkeit (der Erregbarkeit durch äußere Einflüsse)” (85) という言い換えや、「まさにこの、受容性と活動性をひとつの概念にまとめたものが、ブラウンによって Erregbarkeit と呼ばれたものである。」(90) という注の一節によって確証される。ちなみにこの注では、「ブラウンが生命の基礎を Erregbarkeit の中に置いたかぎりにおいて、すべての有機的自然学の唯一真の諸原理は、彼によって洞察された。」として、ブラウンが評価されるとともに、Erregbarkeit の概念の導出がおこなわれていないことが批判されている。また、レシュラウプが、ブラウン信奉者の中では唯一ブラウンの諸原理の中にある学への萌芽を洞察した人として名を挙げられている。(90f.)

第三部では、この Erregbarkeit について詳述がなされる。これは有機体の本質、その第一の特性とされるが、同時に有機体と無機的世界との関連を表わす概念でもあるとされる (143f.)。さらにブラウンの Erregbarkeit については次のような説明がある。

「有機的活動性は、同時に必然的に外部のものに対する受容性であり、逆に、外部のものに対するこの受容性は、同時に必然的に外部に向かう活動性であるという考えを、ブラウンは Erregbarkeit の概念によって実にうまく表わしたが、この概念そのものを導出することはできなかった。」(153)

そして Sensibilität は、この Erregbarkeit において先行するものであり、生命の起源であり、その原因がすべての有機体の原因である。それは脳や神経という器官が形成される前にあるのであり、この器官が Sensibilität の原因なのではなくて、むしろその産物なのである。(155f.) 観念的なものを実在的なものの前提に置く、シェリング自然哲学特有の考え方である。次にガルヴァニズム

との関連で、「(狭義の) Irritabilität が導き出される」が、この表現の背後には、ブラウンの Erregbarkeit が Irritabilität と呼ばれることもあったことが意識されているのであろう。主観としての有機体の側にある感受性を介して、客観としての有機体の中に活動が与えられるが、それは筋肉の収縮(Contraktion)と拡大(Expansion)の交替である。Sensibilität は、その客観としての Irritabilität の中に失われてしまい、それ自体としては存在しない。それは活動性そのものではなく、活動性の源であり、Irritabilität の条件であり、その客観であるところの Irritabilität においてのみ認識できる。(168f.)

けれども Irritabilität も依然として何か内的なものであり、この活動性はさらに外部的な活動性となり、全く外部的な産物として現れ、その中に解消する。Irritabilität がそれへと移行するこの活動性が、形成衝動 (Bildungstrieb)¹⁴⁾、または産出力 (Produktionskraft) と呼ばれる。形成衝動は、そしてこの産出は、産物が完成したのちもなお持続するためには、ある面で無限でなければならない。すなわち、産出力は再生産力 (Reproduktionskraft) でなければならないとされる (171f.)。こうして Sensibilität-Irritabilität-Reproduktionskraft というシェリングの有機体論の三つ組が出揃うことになるが、中でも Sensibilität は重要で、これによってのみ有機体は(自然の)一般的な機構 (Mechanismus) から解放されるがゆえに、生命の根源であるとされる。(189)

次に、この三つの力のうちのそれぞれ二つのあいだには、相互規定の関係があることが示される。特に Sensibilität と Irritabilität のあいだには、一方が高まれば、一方は低くなるという関係があることが詳述される。(197ff.) そして Sensibilität-Irritabilität-Bildungstrieb は、これらの力がこの順番で優勢な人間—動物—植物という、有機体の全領域を貫徹するひとつの力の分岐にすぎないということ、さらにはこの三段階の構造が、無機的世界(磁気—電気—化学的過程)にも共通する普遍的なものであることが示される。(207ff.)

これに続く付録の部分では、これまでの理論にしたがった病気論が展開され、ここにいたってようやく Erregbarkeit, Sensibilität, Irritabilität の概念やそれらの関係が明確に規定される。Erregbarkeit は、Sensibilität と Irritabilität という二つのファクターからなる総合的概念である。Sensibilität は、それが有

14) 「形成衝動」は、Johann Friedrich Blumenbach (1752-1840) が説いたもので、18世紀後期の後成説 (Epigenesis) において中心的な概念となった。特定の生物の形態を維持し、もし破壊されれば回復しようとする衝動である。

機的活動の仲介者であるかぎりにおいて、有機的受容性 (Receptivität) である。Irritabilität は、言葉の本来の意味であるところの、刺激される能力であるのみならず、それが受容性によって仲介されるかぎりにおいて、有機的活動性 (Tätigkeit) そのもの、有機的反応能力である。この二つのファクターは相互に対立する。すなわち、一定の限界内において、Irritabilität が高まると、Sensibilität は低下し、またその逆が起こるが、この限界を越えると双方が低下する。シェリングによる数値を用いた例示によれば、両者のこの関係は、正確に言えば反比例というよりも、総和が一定で上下する関係というべきであろう。その総和が Erregbarkeit なのであるが、これも本来のブラウン説にしたがって Reiz (刺激) が増えれば減じ、刺激が減じれば増えるという関係にある。(230f.)

さて、病気は Sensibilität と Irritabilität の上述のような相互規定の関係、つまり Erregbarkeit の二つのファクターのあいだの不均衡によって制約されている。前者は Sthenie のファクターであり、後者は Asthenie のファクターである。この相互作用は、一定の範囲内においては客観としての有機体に変化をもたらさないが、この範囲を越えると産物全体の存在と相容れぬ状態となり、これが病気として感じられることになる。すべての有機的機能は Sensibilität に従属し、病気は生命のこの究極の源の触発によってのみ可能であるから、そのかぎりにおいてすべての病気の座は Sensibilität にある。病気は Sensibilität に発し、Irritabilität を経て、Reproduktionskraft へと進んでゆくのである。(235 ff.)

以上が『自然哲学の第一草案』における生理学用語の概観であるが、『世界霊について』と比較して言えることは、全体としてレシュラウプの影響により、彼によって改良されたブラウン説、いわゆる刺激理論が本格的に取り入れられ、その中で特に Sensibilität の果たしている役割が大きいということである。個々の用語に関して言えば、前作では別々に論じられていた Sensibilität-Irritabilität の対概念と、Erregbarkeit がレシュラウプにしたがって合成されたということが言える。そしてこのコンテクストによって、当然のことながらこれらの用語の意味内容は、以前と比べれば変化しているのであり、Irritabilität と Erregbarkeit はレベルを異にする概念になってしまっている。Reizbarkeit に関しては、Irritabilität ではなくブラウン説の Erregbarkeit と同じ意味で使われている箇所が多いが、子細に見ると意味を決定しづらい箇所もある (例えば S. 173, 202)。

3) ノヴァーリスにおけるブラウン説受容

ノヴァーリスにおいてはじめてブラウンの名が見られるのは、エッセンマイアー研究ノートの中でであり、1797年秋のことである。そこでは「すべての変化には外部の原因があるはずである。」という引用に疑問符がつけられ、「ブラウンの体系を見よ。ーフィヒテに対して」(Ⅱ-383-43)¹⁵⁾とコメントされている。前者の機械論に対して、自我の根源的能動性を基礎とする後者の知識学が対置されているわけだが、翌年のはじめ頃に書かれた断片では、「フィヒテはブラウンのように仕事を始めた」(Ⅱ-546-110)とされている。両者の共通点は、その立論の一貫性と大胆さにある。

「ブラウンの体系の最高のもは、彼が自分の体系を普遍妥当的なものとして主張したときの驚くべき確信である。ーこの体系は普遍妥当的であるはずであり、そうあるべきである。ー経験と自然が言いたいことを言おうとも。何と言ってもここにすべての体系の本質的なもの、その真に妥当する力が存している。ブラウンの体系は、これによってブラウン主義者のための真の体系となる。これに対してもはや根拠のある異論を唱えることはできない。魔術師が偉大であればあるほど、彼の方法、呪文、手段はますます恣意的になる。すべての人は、自分自身のやり方で奇跡をなす。」(Ⅱ-545 f. -107)

フィヒテの自我もまた、何の前提もないところに自由によって措定された「ロビンソン」であり、そのような大胆な「学的虚構」(Ⅲ-405-717)、仮説によって学の進歩はあるとノヴァーリスは考える。さらには、「原理が少ないほど、その学は高次のものである。」(Ⅱ-450-85)という点でも両者の説は、彼を引きつける。

この時期にはブラウン理論そのものに言及している断片もかなりある。その骨格だけを抽出してみる。用語としては、Erregbarkeit, Reizbarkeitの両方が使われていて、近い時期に書かれた複数の断片(Ⅱ-553-122, Ⅱ-555-127ではReizbarkeitが、Ⅱ-555-130ではErregbarkeitが使用されている。)や、同一の断片(Ⅱ-555-131, Ⅱ-644f. -462)で両者が使われており、前後関係から、ブラウンの「興奮性」に当たる概念として同一視してよいと思われる。またこの時点では、レシュラウプーシェリングにより改良されたブラウン説におけるErregbarkeitを分析して得られるIrritabilität-Sensibilitätの概念対は導入され

15) 引用は以下のテキストにより、ローマ数字で巻数を、アラビア数字でページ数と断片などの番号を示す。Novalis Schriften. Bd. 2 (3. Auflage), Stuttgart, 1981; Bd. 3 (2. Auflage), 1983.

ていないので、両者が別のものとは考えにくいこともある。次の断片では、Reitzbarkeit と、(外部からの) 刺激というブラウン説の二つのファクターが規定されている。

「外部からの刺激は間接的な刺激であり—内部からの刺激は直接的な刺激である。—前者は Reitzbarkeit を前提としている。Reitzbarkeit は、未規定の生命であり—漂う作用であり—間接的な刺激は—均衡の廃棄—異質化—規定された方向である。生命は、病気と同様、停滞—制限—接触から生じる。」(Ⅱ-561-171)¹⁶⁾

ノヴァーリスには、本源的なものは生気を帯びた形なきもの、いわば流動的なものであり、形となってしまったものはそれが固定されてしまったもの、一種退化変成したもの、という根本的な考え方があるが、ここでも、生は二つのファクターによって否定的に規定されたものというブラウン説の基本線が受け継がれつつ、そのような思考法が表されているとも言える。次の断片も同様である。

「すべての生 (Leben) は、一面から見た場合にのみ滅却のプロセスのように見える、溢れんばかりの更新のプロセスである。生の沈殿物が、生けるもの (ein Lebendiges) —生きる能力を持つものである。」

ひとつのファクターは興奮可能なもの (Erregbares) であり、もうひとつのファクターは刺激であり、それらの産物が生である。これは生の基本形態ではあるが、まだ「限界の下にある、副次的な生」である。(Ⅱ-556-135) 刺激による興奮 (Erregung) が生の限界に達するとき、命なきものは生けるものとなる。

ある断片 (Ⅱ-573-220) では、病的体質が、ブラウン説にもとづいて四つに分類されている。

「1. 不足した Reitzbarkeit の体質 (間接的に衰弱的 indirekt asthenisch)

2. 過剰な Reitzbarkeit の体質 (直接的に衰弱的 direct asthenisch)

a. 過剰な刺激の体質 (直接的に強壯的 direct sthenisch)

b. 不足した刺激の体質 (間接的に強壯的 indirect sthenisch)

1 または a は麻痺か—間接的炎症に—2 または b は強壯か直接的炎症に特になりやすい。

16) ノイバウアーは、ノヴァーリスがブラウンの用語をみずからの哲学に合致するように変えた例としてこの断片を挙げている。それによれば、身体は意識と外界のあいだを仲介する役割を持つので、外的刺激は心に間接的に作用する。さらに、意識を規定するにさいして、決定的衝撃は心それ自体の操作から来るので、外部刺激は二次的役割しか持たない。Neubauer, S. 71

直接的炎症は間接的麻痺でありー逆も言える。」(Ⅱ-573-220)

1は、強すぎる刺激が、はじめは多量にあった Reitzbarkeit を消尽してしまう場合である。2は、Reitzbarkeit (=Erregbarkeit) の欠如のために、興奮が少なすぎて生命機能が十分でない。aは、1と同じ条件でそれに至る以前の状態。bは、少なすぎる刺激で過剰の興奮が引き起こされる状態である。前三者は、ブラウン説にしたがった分類であるが、bだけはノヴァーリスの考案による。¹⁷⁾

Reitzbarkeit (Erregbarkeit) と容量 (Capacitaet) の関連については次のように言われている。

「容量が少ないほど、刺激の作用は速くなりー物質あるいは興奮可能なものは敏感になる。ー(炎症になりやすくなる。) Reitzbarkeit と Capacitaet は、反比例する。」(Ⅱ-555-131)

上記の病的体質の分類は固定的なものではない。健康はむしろ刺激量の調節によりこれらの領域を含みこんだある程度の振幅を持つもので、またその自然な調整機能の養成によって増進されるものと考えられている。

「完全な健康体を生き生きと活動させ続けるものとして、刺激の過不足の交替にまさるものはない。ー刺激の不足は、健康体を刺激して償いをつける。ー刺激の過剰は、健康体を機能の抑制や阻止へと導く。過剰は健康体を調整して活動を減少させる。

不足は健康体を活動させー過剰は休ませる。」(Ⅱ-645-463)

おそらくこの刺激量の調整によるであろう Reitzbarkeit の調整は、意志によって可能ではないかとノヴァーリスは考える。

「最高の Reitzbarkeit と最高のエネルギーが合一しているのが、完璧な体質の特性であろう。この両者は、すべての両極端と同様、実現された自由によって、意志によってのみ合一することができる。すなわちーReitzbarkeit を思いのままに調整しー印象を思いのままに変化させる能力ーReitzbarkeit を思いのままに支配する能力が、人間の中にあるはずだ。」(Ⅱ-577-235)

彼はこの能力の鍵を、ボネ (Charles de Bonnet, 1720-1790) の影響から、注意力 (Aufmerksamkeit) の中に見出す。

少ない原理から構成される簡明な理論は、アナロジーのための「公式」を容

17) Novalis Werke. Hrsg. und kommentiert von Gerhard Schulz, S. 777. bによって理論の整合性をさらに押し進めようとしたのであろうが、この断片全体はのちに線を引いて削除され、改良が求められることになる。

易に提供することになる。特に、この時期に書かれ出版を意図された断片集『花粉』、『信仰と愛』、『テプリッツ断片集』には、ブラウンの用語をアナロジーに用いたものが散見される。

「誤謬と先入見は重荷である。－自立的な、どんな重みにも耐えうる者にとっては間接的な刺激剤 (indirect reizende Mittel) であるが、弱い者にとっては積極的な弱化剤 (schwächende Mittel) である。」(Ⅱ-432-46)

「フランス革命の医学的な見方。－フランス革命はどうやって治療されねばならないか。－その治療計画－われわれはフランス革命によっていかに治療されるか。

中国人の衰弱 (Asthenie) －タタール人の干渉。人類の歴史の医学的な取り扱い。」(Ⅱ-616-426)

ある断片 (Ⅱ-620-438) では、精神的な闇としての「夜」が「直接的衰弱」と「間接的衰弱」に分類され、「無思慮」(Unbesonnenheit) が衰弱のひとつとして表現されている。上記の断片集中にはない別の断片 (Ⅱ-646-469) では、怠惰もまた衰弱の一種のように扱われている。

単なる受容にとどまらず、受容する先から自分の関心にしたがって取捨選択や加工をしてゆこうとする傾向が見られるが、これは以後の時期においても、また他の思想受容のケースにおいても共通するのであり、ハンゼンはこれに着目して濾過的受容 (filternde Rezeption) とか、選択的受容と呼んでいる。¹⁸⁾

次に、1798年から翌年の始めにかけて成立した自然科学研究ノートを見てみよう。

ここでもやはり、ブラウン説を基礎とした健康と病気の領域に関する図式化の試みが見られる。

「破壊点

病気圏 a. 間接的衰弱の限界

b. 直接的強壯の限界

健康圏 c. 満足の限界

d. 無差別点 (Indifferenzpunct)

e. 渴望点

病気圏 f. 直接的衰弱の限界

18) Erk F. Hansen, S. 295, S. 493.

g. 間接的強壯の限界

破壊点」(Ⅲ-79f.)

この図式にはさらに三つの同心円からなる図解が付され、その中心は d であり、最小の円周が c, e を意味し、第二の円周は b, f を、最大の円周は a, g を意味するとされる。これらの同心円は、中心を通る垂直線によって半分に切られ、左側が図式の a から d (つまり、刺激過剰と Erregbarkeit の不足)、右側が d から g (刺激不足と Erregbarkeit の過剰) の領域となっている。最小の円内が健康圏、その外側で最大の円の内側が病気圏と書かれているが、さらに付されている解説によれば「a および g の限界を越えると、その結果は破壊—死—となる。」体質との関連で言えば、健康圏が相対的に拡大されると強くなり、それが病気圏に対して縮小されると弱くなると説明されている。この図式もまたのちに削除されており、最終的なものとは考えられていない。図式の説明に続く部分では、健康が「外部のものに対する排斥能力」や「刺激の導体」として規定され、「健康が斥力、病気が引力として一定の量にまとめられた形で表現されるような構造図」も着想されている。

用語の点では、やはり Erregbarkeit と Reitzbarkeit の混用 (例えばⅢ-53) が見られるが、注目すべきは、1798年秋におこなわれたシェリングの『世界霊について』からの抜き書きにおいて、Erregbarkeit が総合的概念であること (Ⅲ-112)、Irritabilitaet と Sensibilitaet の概念対がはじめて挙げられていることである。ノヴァーリスはこの引用において、酸素との関連に着目している。

「Irritabilitaet を高めるものは、酸素を減少させる。—また、その逆も言える。」
 「神経がある器官に向かうことが少なければ少ないほど、その器官の酸素に対する容量 (Capacitaet) は少なくなり、この容量が少なくなればなるほど、この器官における還元のプロセスは必然的に、つまり、ますます随意的でなくなり、Irritabilitaet は休まないものとなる。」(Ⅲ-113) 上記の概念対については次のようなことが引用されている。「Sensibilitaet—Irritabilitaet の否定」、
 「Sensibilitaet なしに Irritabilitaet なく、またその逆も言える。」、「Irritabilitaet と Sensibilitaet をひとつの概念に合一したものが、本能 (Instinkt) を与える。—本能とは、Sensibilitaet によって規定された運動への衝動だからである。」
 「Sensibilitaet は Irritabilitaet と反比例して増減する。」(Ⅲ-114) ここにノヴァーリス自身の「最高の Sensibilitaet と最高の Irritabilitaet の合一」というコメントが挿入され、この反比例関係に依存しない状態が目標に掲げられる。次の行は、研究者たちによってしばしば指摘される箇所であるが、「精神の身体への影響とその逆についての説明は、超越論的哲学の諸原則にしたがえば不

可能である。」というシェリングからの引用に6つの感嘆符と、「間違っている」(Ⅲ-114)というコメントが付されている。

シェリング同様、Erregbarkeit を無機的世界にも適用しようという試みも見られる(Ⅲ-63では磁気に、71では天体の物理学に、179では力学に)。

次に、1798年秋から翌年の始めにかけて成立した『万般に関する草稿』を見る。ここでは病気や医学に関する記述で分量の多いものがしばしば見られ、改良されたブラウン説に関する研究も熱心になされている。刺激理論と体液理論の総合の試みや、刺激理論と動物電気(ガルヴァニズム)との関連づけもなされているが、その詳細に入ってゆくことは拙稿の本題からそれることになるので、ここでは特に Sensibilität-Reizbarkeit などの用語に関わるものを重点的に見てゆきたい。¹⁹⁾

まず気づくことは、シェリングの著作で Sensibilität と対応していたのは Irritabilität であることが多かったのに、ここでは内容的には同じものであるが Reizbarkeit が多いということである。そして、この時期においては、Reizbarkeit は前の時期同様、Erregbarkeit と同じ意味に使われていると思われる場合もある(Ⅲ-289-274, 307f.-372)のだが、それが結局は Sensibilität と対をなしている Irritabilität と同義語として使われることへと移行してゆくということである。(そのかなり明確な境界は、Ⅲ-316-407であろう。)[「より reizbar な者は、より多くの血管、より繊細な筋肉を持つであろうし、より sensibel な者は、特にしばしば触発される部分において、より多くの、より繊細な神経を持つであろう。」(Ⅲ-249-55)]という箇所は、前者が筋肉の、後者が神経の能力であるというハラー以来の理論が、当時の刺激理論にも取り入れられていたのであろうということを推測させる²⁰⁾。

「Reizbarkeit と Sensibilitaet は、魂と肉体—あるいは精神と人間、ないし世界と似た関係にある。」(Ⅲ-316f.-407)においては、「Sensibilitaet はすでに魂に属しているのではないか。」(Ⅲ-249-55)という記述から正確な対応関係を

19) ブラウン説の受容経路について、シュルツは、ノヴァーリスがブラウン説を原典からはほとんど読んでおらず、エッシェンマイアー、シェリング、レシュラウプを通じて知っただけだと述べている。ノイバウアーもほぼ同じ見解で、ノヴァーリスは、原文も翻訳も読んでおらず、彼が実際に論じているのはレシュラウプの刺激理論だと述べている。Novalis Werke. Hersg. und kommentiert von Gerhard Schulz, München, 1969, S. 777. ;Neubauer, S. 105f.

示すとするば、冒頭の対概念の順序を逆に読みたいところである。

レシュラウプ—シェリングの理論では、Sensibilität と Irritabilität は反比例のような関係にあるとされていた。しかしノヴァーリスは、最高のものを両立させたがる彼のこれまで見られた傾向をここでも示し、上述の関係から離れた次のような理想型を提示する。

「多くの内部刺激—多くの Sensibilitaet。多くの外部刺激、多くの Reitzbarkeit。これまで、対立物の交替がここでもなされていたということ—そして外部刺激と内部刺激が—Sensibilitaet と Reitzbarkeit が....互いに他を廃棄していたということはひどくまずいことである。この結果、外部刺激の増加によって内部刺激は減少し、Sensibilität と Reitzbarkeit の関係も同じであった。不完全な医学は、不完全な政治と同様、不完全な実在の現在の状態と必然的に結び付いている。....しかし、学的な理想が提示されることが必要である。—対象と技術の将来的な改善の必然的な基礎、開始として。....」

魂と肉体の総合—そして Reitzbarkeit と Sensibilitaet の総合。それらはもちろんいまずぐに無差別圏 (Indifferenzsfären) を通して相互移行を行う。この無差別圏の無限の拡大—ゼロの現実化、実現は、不死性の芸術家〔医師の理想としての〕の重要な問題である。」(Ⅲ-317f. -409)

「無差別圏」、「ゼロ」はこの場合、先に見た病気と健康の領域に関する図式の中心にあった点 (Indifferenzpunkt) のように、対立する二つの要素が等しく力を及ぼし、うち消しあう圏域のことをいう。ここでは Reizbarkeit と Sensibilität、すなわち肉体の機能と魂の機能が十分に発揮されながら均衡を保つ状態であり、その拡大がめざされているのである。ところで、外部の刺激とそれにつながる Reitzbarkeit については比較的自由に調整することができるが、問題は「Sensibilität の増大と形成、しかも、Reitzbarkeit と外部の刺激がそのさいに受動的ではなく、おろそかにされないその方法である。」ここに配慮しなければ、上に見た反比例の法則によって、「ペネローペの織物」のように、一方が結ばれてゆく先から他方はほどけてゆくことになる。さらに、ここにまた酸

-
- 20] 拙稿『1800年におけるノヴァーリスの病気論』（日本独文学会中国四国支部発行「ドイツ文学論集」第26巻、1993）では、Sensibilität と Irritabilität (Reitzbarkeit) の関係について、ハラーにしか言及しなかったが、これは不十分であった。これは、キールマイアー、レーシュラウプ、(シェリング) などを経た刺激理論の Erregbarkeit の下位にある対概念であり、当然ハラーにおける意味とも違ってきているはずである。

素の理論がなかばアナロジー的に取り入れられる。精神 (Geist) が酸素 (Oxigene) であり、魂は酸素の「透入性の基」(die eindringende Basis) である。「生命は炎のプロセスである。精神が純粹であればあるほど、生命、酸化あるいは生気づけはいっそう明るく、炎のように燃え立つ。—有機素 (der organische Stoff) は生気づけることができ、また燃焼することができる。」このように、生は、酸素あるいは「有機素」なるものによる燃焼酸化の過程とされる。

別の断片では、Sensibilität が刺激を諸器官に分配する (vertheilen) 能力でもあるとされる。「刺激は、Reitzbarkeit を間接的に—すなわち Sensibilitaet を通して減少させる。.... Sensibilitaet は分配する能力である。適切な分配によって、器官は力を最高度に発揮できるようになる。」(Ⅲ-322-437) ここで Sensibilität は単なる受容能力だけではなく、Reitzbarkeit に働きかけることで調整をおこなう能力でもあることがわかる。少しのちに出てくる「基準」(das Maas) は、Ⅲ-307f. -372とその注によれば、エッシェンマイヤーによるブラウン説解釈と関連したもので、刺激と Reizbarkeit の比という意味も含んでおり、各個人によって一定であるとされる。「この基準は一定の間隔までしか影響をおよぼさない。—ただしこの間隔に比例して弱くなるが。この圏域の向こう側、あるいはこの作用があまりに弱くなるところで、正しい交替は終わり—Sensibilitaet がそれとともに増大し—こうしてはじめて強壯が生じる。—この強壯は、阻止されることなく死で終わる。この基準の有効性を、医師たちは自然の治癒力と呼ぶ。.... Erregbarkeit が大きくなればなるほど—この基準の能力が大きくなればなるほど—体質はますます完全になる。」Sensibilität の増大が病気の発生に関わりのあることが、ここでのめかされている。さらに次の一文は、レシュラウプ(—シェリング)の明らかな影響を示し、加えて「運動性」(Beweglichkeit) と「(酸素) 容量」(Capacitaet) という新たなファクターとの関連を提示する。「Erregbarkeit を分析すると、Sensibilitaet と Reitzbarkeit—あるいは運動性と容量からなっている。」²¹⁾

21) のちの時期のものであるが、「Capacitaet と Sensibilität は反比例する。」(Ⅲ-597-264) という断片がある。シェリングのところで見たように、Capacitaet は Irritabilität に比例する。そしてまた、Sensibilität, Irritabilität は、反比例の関係にあるのだから、Sensibilität, Capazitaet も同様に反比例することになる。おそらく Beweglichkeit もまた、Sensibilität と比例の関係にあるのだろう。これらの概念の関係と、シェリングの解釈との相違については Neubauer, S. 99を参照のこと。

この時期には「ブラウンの病理学は、内面的で、詩的な素材をーいわゆる哲学的な素材を含んでいる。」(Ⅲ-351-502) という肯定的な評価もないではないが、次のような否定的な見方もなされており、これ以後批判的な態度が強くなってゆく。

「ブラウンの刺激理論は、以前ほど好意的な光の中で私には見られないということの、ますます多くの根拠が積み重なってくる。生は生からのみ説明される。ー興奮 (Erregung) は刺激からのみ。」(Ⅲ-369-593)

最後の一文は、生を刺激によって起こされた興奮状態と捉えるブラウンの機械論に真っ向から反対したもので、生をより複雑な、あるいは主体的な根拠からなるものと考えようとする傾向を示している²²⁾。けれどもブラウン説は、体液説などの古い理論と経験の集積から成っていた従来の医学にとっては革命的な理論であり、医学が科学へと進歩するのに寄与したという意味で「一時的な科学的刺激」でもある。「それは真の形式に似た形式を持つがー基礎は間違っている。」(ebd.) 直後の記述では、レシュラウプの酸素理論も批判される。「レシュラウプは、他の人々と同様、酸素そのものを、刺激を減少させるものにー負の刺激にすると、誤る。ーそうであることもあるがー逆もあるのだ。」続いてブラウンの一般的諸原則は、それがもっと一般化されて、特殊なものが排除されるならば正しいとされた上で、「彼の薬学、症候学、特殊病理学ー特殊治療法は何の役にも立たない。例えば阿片についての彼の理論は、単に経験的でー盲目的だ。」と言われる。刺激と Reitzbarkeit (これは Erregbarkeit の意味であろうか。) は、哲学的な「実体」(Substanzen) であって、具体的には表わすことができず、「交替する偶有性の系列」においてしか表せない、とされる (Ⅲ-371-594)。次の記述ではブラウンやレシュラウプの名は挙げられていないが、内容的にはやはり機械論的な刺激理論への批判になっている。「『誘因なくして運動なし』などの、力学とー刺激理論の基本法則への反駁。私の命題：すべての運動は運動によって、すべての興奮は興奮によってしか生じない。」

(Ⅲ-387f. -649) なおこの記述の最後では、生命を隣接し合う異種のさまざまな部分からなる連鎖回路に流れるガルヴァニズムと見なす、リッター (Johann Wilhelm Ritter, 1776-1810) の実験が指示されている。次の記述では、Irritabilität をすべての有機的諸力の中心であるとする『世界霊について』に

22) 少し前の時期のものではあるが、次の断片からも、機械論に対する拒否の態度が見て取れる。「生命のすべての始まりは反機械的でー力づくの突破ー機械制に対する反対でなければならない。」(Ⅱ-575-230)

おけるシェリングが批判されている。「シェリングは、世界の Irritabilität 現象からしか出発しない。―彼は筋肉を基礎とする。―神経は―血管は―血液は―皮膚は―細胞物質はどこにあるのか。なぜ彼は、化学を重んずるのに、プロセスから出発しないのか。―接触の現象―連鎖から。」(Ⅲ-470-1102)「接触の現象―連鎖 (Kette)」とはすなわち、ガルヴァニズムの回路のことであるから、ここにもリッターの影響が見て取れる。

次に、1799年から翌年にかけて成立した断片と研究ノートを見る。この時期における用語の特徴は、Irritabilität-Sensibilität の概念対が時折取り上げられていて、その際これまでに見られたように前者の代わりに Reizbarkeit が用いられることはほとんどないということである。ひとつだけ例を挙げておく。

「Sensibilitaet の Irritabilitaet に対する関係は、色の光に対する関係と同じで―Sensibilität は屈折分散した Irritabilität ではありえないだろうか。」(Ⅲ-602-299) また次の記述では、シェリングらのおこなう概念の分析に対する疑問が呈されている。「はたして動物性をいくつかの力に分解してよいのだろうか。Irritabilität に、Sensibilität や形成力などに。」(Ⅲ-664-602) Erregbarkeit についてはほとんど言及されることはなく、その代わりに Sensibilität の役割が強調されているが、これについてはまたのちに触れる。

この時期にもブラウン説への批判が見られる。

「われわれの身体は、われわれがふつうに思っているよりもはるかに抽象的なものではなからうか。このような考え方がブラウンの学説の中にはある。彼はもしかすると、われわれが思っているよりもはるかに自由で、非体系的で、自在なのかもしれない。」(Ⅲ-595-246)

この断片そのものはまだ中立的なもので、むしろ好意的でさえある。しかし、その直後にある「病気の本質は、生の本質と同じようにおぼろげである。」(Ⅲ-595-247) という断片の内容は、ブラウン説とは対極にあるものだ。したがって病気の個別的な性格や、複数の病気のあいだの関連にも着目することが要請される。

「たいていの病気は、人間や花や動物のように個性的であるように思われる。.... 真の病気はすべて、遺伝的であるか―流行性のものであるか―あるいはつまるところ有機的であって―生殖と感染によってのみ生じうる。それゆえ、諸病の自然史や親縁性 (合併症はここから生じる。)、比較は、実に興味深いものだ。」(Ⅲ-615-366)

ブラウンへの批判は次の断片で具体化される。

「ブラウンは、身体の量的、質的な関係に全然目を向けずー身体を、その状態がきわめて多様な原因によって変えられるー最高に複雑な機械とは見なさなかった。....

病気について彼は何も知らない。彼の理論は、人体に応用された高次の機械論である。

それゆえ、彼は生命についても何も知らない。本来の意味での病気は、生命の不思議な産物なのであってーこの産物はたしかに興奮が多すぎたり少なすぎたりして生じることはありうるがーしかし、興奮そのものではない。」(Ⅲ-602-296)

病気の発生は、第一に有機体内部での力動的変化にもとづくのであり、外部から作用する刺激の量的変化によるのではない、というのがハンス・ゾーニによるこの断片の解釈である。²³⁾別の断片では、ブラウンがわれわれの医学の大きな誤りをそのままつかみ取って「人体を単純な抽象概念として扱った」とされ、人体は「諸々の個だけからなるはてしない連鎖」(Ⅲ-612-353)であるとリッター流の解釈がなされている。

次の断片でノヴァーリスは、病気の原因を Sensibilität に求めようとする。

「Sensibilitaet とその器官である神経によって、病気は自然の中に入ってくる。これによって、自由、恣意が、自然の中に持ち込まれた。そして、それによって罪、自然の意志に対する背反、すべての悪の原因が持ち込まれたのだ。」(Ⅲ-657-591)

病気と罪の共通性に着目するという点でも、この断片は次のものと関連が深い。

「すべての病気は、超越であるという点で、罪と同じである。われわれの病気は、より高い諸力に移行しようとする、高められた感受性のすべての現象である。人間は、神になろうとしたとき、罪を犯した。」(Ⅲ-662-601)

超越 (Transzendenz) とは現在の領域の踏みこえであり、それによって石は植物に、植物は動物にというように、自然物はその階層を高め (ebd)、人間は神のような存在になろうとする。それは病気や罪と呼ばれる一面をもつが、他方自由と恣意を許すものであり、その可能性を与えるものとして、Sensibilität はここで非常に重要視されている。²⁴⁾

この時期の自然科学研究においては、酸素が重要な役割を果たしているが、刺

23) Hans Sohni: Die Medizin der Frühromantik. Novalis' Bedeutung für den Versuch einer Umwertung der "Romantischen Medizin". Freiburg i.Br., 1973, S. 52.

激理論との関連においても同様であり、生や病気が酸化、還元によって説明されている箇所をいくつも見出すことができる。

「神経によいものはすべて、筋肉を損ない、またその逆。酸化は筋肉のためになり、還元は神経のためになる。」

「病気とは、酸化可能性の減少であり、それゆえに減じられた酸化である。」(Ⅲ-658-593)

「全自然の生は、酸化の過程である。すべての刺激は酸化させ—酸化の媒質である。」(Ⅲ-659-596)

「酸化は悪魔に由来する。生は精神の病気である。—情熱的な行為である。.... 病気は Sensibilitaet とともに蔓延する。」(Ⅲ-659ff. -597)

「われわれの諸元素の衝動は、還元をめざしている。生は強制された酸化である。」(Ⅲ-687-676)^{25]}

結び

以上で明らかになったことは、用語法については、Erregbarkeit は、ブラウンの興奮性であり、Irritabilität は、改良されたブラウン説における Erregbarkeit の下位概念で Sensibilität と対をなすものであるという点では一貫している。この点でノヴァーリスは、シェリングと軌を一にする。Reizbarkeit については、時期によってその意味が異なり、はじめは Erregbarkeit と、のちには Irritabilität と同一視してよいであろう（この点ではシェリングと順序が逆になっている）。その境界は1798年の秋頃と思われる。もしも Reizbarkeit がこれ以外の意味を持つとすれば、ほぼ同義語のような三つの言葉でもって、それぞれ異なるものをさすことになり、理論の説明としては複雑になりすぎるのではないと思われる。そのことはノヴァーリスのみな

24] ノイバウアーは、ノヴァーリスの Sensibilität という用語の曖昧さを指摘し、ここにヘムステルホイスの影響を見ている。ヘムステルホイスの「道德器官」には、能動的な部分と受動的な部分があり、後者が Sensibilität である。両者のアンバランスは、恒常的な訓練や教育によって直すことが出来るとされる。(S. 96) またシェリングと比較してのノヴァーリスの Sensibilität の評価については S. 100ff. 参照。

25] これらの断片と酸素理論の関連については、Johannes Hegener: Die Poetisierung der Wissenschaften bei Novalis. Bonn, 1975, 482ff. 参照。

らず、シェリングやそれ以外の医学者についても当てはまるかもしれない。ただし以上のことは、シェリング、ノヴァーリス以外の原典を見ていない筆者にとっては、状況証拠的なものから導かれた推測の域を出ない。これらの用語の意味をいっそう明確に知るためには、当時の医学、生理学関係の一次資料、特にレシュラウプの調査が今後の課題であろう。

内容的な変遷についていえば、ノヴァーリスは、ブラウン説、およびその改良型であるレシュラウプの刺激理論の機械論的な部分、すなわち生が刺激によって生じた興奮でしかないとか、外部からの誘因 (Sollicitation) によるものだとかいう説にははじめから反対であった。けれどもその理論的一貫性や単純性、思弁性には心情的に惹かれるものがあつたと思われる。後期になると、病気の個性的性格や Sensibilität との深い関連から、ブラウンの病気観は厳しく批判されるようになる。シェリングは、『第一草案』において Sensibilität に、自然の一般的機構からの解放を与える生命の根源として高い位置を与えているが、ノヴァーリスはそれをも越えて、罪や病気がそのひとつの現われであるような危険な面も持つ超越としての自由を切り開くための可能性として Sensibilität を考えるのである。